

拠点自己評価報告書 (東京大学STIG)

令和7年12月24日

1. 事業の概要

- 拠点の目的
 - 科学技術イノベーション政策に関する政策形成人材、政策研究人材、研究開発マネジメント人材の育成
 - 科学技術イノベーション政策に必要なエビデンス構築手法と政策形成プロセスの教育
 - 工学・社会科学・公共政策を横断するデザイン・設計論の構築
- 沿革
 - 第1期、公共政策・工学を領域の軸とし、政策形成や科学技術イノベーション政策研究のための人材の育成を目的として、既設の大学院課程に部局横断型教育プログラムを設置。総合大学としての強みを生かした教育プログラムを構築し、政策形成プロセスとエビデンス構築の双方を理解できる人材の輩出を目的に文理横断的な教育研究を推進。
 - 第2期は教育プログラムを拡大していき受講学生・修了学生ともに徐々に増加。
 - 第3期は対象を博士課程人材育成やエグゼクティブトレーニングへ拡張。

2. 事業の実施状況

(1) 人材育成

1) 目標と運営・活動状況

- 修士・博士課程大学院生を対象とした部局横断型履修証明プログラムを教育プログラムの柱として運営。同プログラムを継続的に改善すべく、プログラムの理念に合致する学内の科目を積極的に取り込み、社会情勢や学生のニーズに応じて提供する授業科目の更新を継続的に実施した。
- 同プログラムを中核とした上で、博士課程学生を主対象とした支援活動の充実化、民間教育プログラムの対象を企業・行政・自治体等の専門家へと拡張するための一連の活動を進めた。

2) 目標の達成状況と成果

- 部局間横断教育プログラムの継続的運営を通じて、延べ1,178名（年平均90名の新規登録）の学生が履修登録を行い、200名以上の修了生が輩出されている。とりわけ第3期の令和3-6年の4年間では90名修了と目標を大きく上回る成果を上げた。

(2) 研究・基盤

1) 目標と運営・活動状況

- (a) 法制度・規制・政策形成過程・ガバナンス、(b) データ分析・人材政策、(c) 社会システムのデザインの領域における基盤研究を推進した。

2) 目標の達成状況と成果

- R3からR7年度の間、(a)論文98件、口頭発表135件、(b)論文20件、口頭発表26件、(c) 論文19件、口頭発表55件と目標（年平均、論文 12 件、発表 14 件）を大きく上回る成果を挙げた。

2. 事業の実施状況（続き）

（3）共進化

- 活動概要：第Ⅱ・第Ⅲフェーズの共進化実現プロジェクト・準備ステージでは、宇宙（デブリ関連技術のルール形成、SAAに関する政策）、バイオエコノミー・バイオものづくりの政策課題と制度設計、ミッション誘発型研究戦略、博士等に関する情報基盤の充実・強化及び人材政策と大学院教育の改革、自然科学と文化芸術・人文社会科学の連携などを共進化の目標として、9つのプロジェクトを展開した。それぞれの研究テーマと関与した教員の専門性に応じて、協働での国内外のヒアリング調査、意見交換、研究分析、手法開発、勉強会・セミナー等の企画・実施、学会発表、論文発表、学生への学びの場の提供等を行った。
- 成果
 - 各年度の数値としての成果は以下の通りである—R3年度：プロジェクト報告4件＋準備ステージ報告1件、論文2件、発表9件、R4年度：プロジェクト報告5件、論文5件、発表6件、R5年度：プロジェクト報告3件、論文1件、発表3件、R6年度：プロジェクト報告3件、論文4件、発表13件。
 - これらの研究では、論文公表、政策提言等の提示、学会・国際機関や国際会議での発表、新たな課題の提示、評価手法の開発と分析などを行った。また、共進化の活動に学生をRAとして起用するなど、人材育成への寄与を行ったプロジェクトもある。さらに、拠点として地道に取り組んできた基盤研究と連動させた形で、それらを起点とした第3フェーズへのつなぎも行うことができた。
 - 特に第3フェーズでは、宇宙やバイオエコノミーといった国際的視点と省庁横断的な検討が必要とされる課題において、共進化プロジェクトがハブ機能を提供し、省庁横断的連携を伴う取り組みの深化が見られた。また、共進化のプロセスに由来する共通認識の醸成、情報収集能力の向上、人的ネットワーク構築、信頼関係など、必ずしも形に見えないが共進化を進める上で必要不可欠な蓄積を行うことができた。

（4）ネットワーキング

- 活動概要：研究者・実務家・学生のネットワーク形成を目的に、政策プラットフォームセミナー（PoPセミナー）、国際シンポジウム、サマーキャンプ、OBOG会・博士研究発表会、エグゼクティブセミナー関連イベントを継続的に実施した。PoPセミナーは年10回以上を目標に年14～19回、国際シンポジウムは年1回以上を目標に30～200名規模で年2～3回、サマーキャンプは学生10～20名・教職員7～8名が毎年参加し、目標以上の活動状況となった。また、OBOG会は隔年目標に対し毎年実施し、博士研究発表会も令和5年度以降毎年開催した。さらに、エグゼクティブセミナー関連イベントも令和5年度毎年1回開催した。
- 成果：サマーキャンプ、国際シンポジウム、PoPセミナー、OBOG会・博士研究発表会など多様な交流活動の継続的な実施により、科学技術イノベーション政策に関する研究者・実務家・学生間のネットワーキングが促進され、政策と学術の接点を広げるとともに、分野横断的な議論の場を提供し、共進化的な知の循環を促進する重要な基盤となった。PoPセミナーは目標以上に継続的に開催され、幅広いテーマのもとで参加者間の意見交換が行われた。これにより、研究と実務の最新動向に関する情報共有と意見交換を領域横断的に行う場として定着しつつあると言える。国際シンポジウムは毎年開催され、国内外の専門家を交えた議論の機会が継続的に確保され、国際的知見と国内の政策課題を接続する接点の強化とともに、国境を超えた論点共有・ネットワーク形成を後押しする基盤となった。OBOG会は修了生・現役生・教職員の接点を継続的に確保し、経験・知見の共有や相互の学びにつながる関係性を維持・強化することで、教育・運営の改善および研究交流の活性化に資する基盤となった。

3. 総括的な自己評価

• 第3期の評価

- 人材育成：修了生数目標については年15人修了生をほぼ達成し、近年では目標を超過した修了生を輩出している。科学技術イノベーション政策のための研究を行う各部局の博士課程学生のプラットフォーム構築と研究支援を開始した。
- 研究・基盤：国際的発信力を強化するとともに、基盤研究を支える外部資金を獲得した。
- 共進化：宇宙・バイオ・ミッション誘発型研究の共進化プロジェクトに参加し、成果をあげた。
- ネットワーキング：PoPセミナー・国際シンポジウムを通じた広範なネットワーク形成を行った。

• 第1～3期総括

- 教育プログラム開始13年間で新規登録者は1178名、修了生は200名以上を輩出し、目標を達成した。
- 東京大学において科学技術イノベーション政策に関する教育を部局横断型プログラムとして制度化した。
- 社会課題に即した研究成果を政策現場に還元し、関係者間のネットワークを構築した。

4. 事業終了後の自立化に向けた展望

• 体制

- 学部・部局横断型教育プログラムとして制度的に継続可能な形を確保している。
- 基幹教員2名を承継教員として確保した。
- 特任教員2名程度を継続配置予定となっている。

• 資金調達

- 学内予算要求の継続。
- 民間企業・財団からの寄附講座・社会連携講座等との連携の強化。
- 社会人に対する教育プログラムの維持・拡大。

• 展望

- 部局間横断型教育プログラムとしての科学技術イノベーション政策教育の継続
- 社会人に対するエグゼクティブトレーニングの強化
- 他拠点との連携による教育・研究の相互補完の維持
- 国際的な政策研究ネットワークの維持・拡張